

研究ノート

経済学のフランス的起源——世俗的倫理と世俗化の論理

米 田 昇 平

目 次

1. 経済学の条件——世俗的倫理と世俗化の論理
2. 17世紀フランスの新思潮——アウグスティヌス主義
3. 功利主義と利益説
4. 経済学のフランス的起源

1. 経済学の条件——世俗的倫理と世俗化の論理

ボワギルベールは、絶対王政下の17世紀末に、ケネーやスミスに半世紀以上も先んじて、「レセ・フェール」を基本的な秩序原理とする画期的な自由主義の経済学を創生した。ここに始まる18世紀フランス経済学の展開に、経済学の多元的な成立・形成の一翼を担う独自の特徴的な傾向を見出すことができることは、前著（米田，2005）でおおよそ明らかにしたところである。

独自の特徴の一つは、「富裕の科学」としてのあり方に関して、旧体制下のフランス社会に固有の諸事情を反映して、独自の富の理論ないし生産力の理論とそれに立脚した社会構想が生みだされることである。この点では、ボワギルベール→カンティロン→ケネーの重農主義へと至る理論的系譜がよく知られているが、他方で、ときにそれと対抗的に、フランス産業の振興にとって時代遅れとなったコルベルティスムに代わる新たな政策科学が探究され、ムロン→カンティロンの一側面→グルネやフォルボネへと至るインダストリーの理論ないし生産力主義の系譜が形成されていく。とくにイギリスに対抗しうる生産力体系の樹立を目指したグルネとフォルボネの「自由と保護の経済学」は、革命後のフランス産業主義の淵源ともなったから、この意味で、そこにこれまでケネーのまばゆい光の影にほとんど隠されてきた19世紀へと連続する豊かな脈を見出すことができた。

今一つの注目すべき特徴は、欲求や効用の視点から人間の経済活動のあり方や経済社会のダイナミズムに迫ろうとする姿勢が際立っていることである。経済社会を功利的人間の織りなす「欲求の体系」と捉える社会観、功利・効用を価値判断の基準とする功利主義、功利・効用に富や価値の源泉をみいだす効用理論・効用価値説、生産に対する消費や消費欲求の規定性に注目する消費主導論、経済行為の心理的誘因に着目する心理主義、さらには感覚論哲学における快苦原理をも含めて、これらの相互に親和的な理論や観念が、この時代のフランスの多くの経済論説の構成を彩っており、全体として一つの特徴的な傾向を形作っていた。

17世紀以降、脱宗教と宗教自体の世俗化の二方面で進む世俗化のトレンドが顕著になっていく。このトレンドは商業社会への社会の変容と軌を一にすると言ってよいが、こうした商業社会の到来は、一方でその陰面としての消費社会の出現を告げるものであり、多くの人々が、世俗的幸福の証しとして、あるいは世俗の生活における自己実現の証しとして、欲求のおもむくままに常により高次の多様な消費物資を求めてうごめく新たな時代が出現しつつあることを意味していた。フランス経済学は、このような潮流のなかで鍛えられ、自らを形成していく。「吝嗇を旨とする国民か、もしくは規則の厳格さによって、骨の折れる、しかも実りの少ない労苦に献身的に励む修道僧の国民」とは異なって、「強靱な精神に恵まれているというよりは、むしろ情熱的な国民のもとでは」（Forbonnais, 1767, I, p.252）、境遇の改善のためであれ他者との差別化・差異化のためであれ、人々の求める自己実現の手段はおもに消費であり、したがって満足（幸福感）のおもな原因もまた消費欲求の充足である。しかもこのような人々の強烈な欲求こそが、商業社会を進展させる原動力であると考えられた。このように、勤労意欲や

営利欲の根源にある、社会を動かす人間のエトスとしての消費欲求の本源性に目が向けられ、その視点から、ときとしてそのことがはらむ問題性の自覚を伴いつつ、独自の経済学の認識が導かれていったのである。

世俗化のトレンドによって伝統的、神学的な価値規範・世界像からの切断が生じたとしても、現実世界は決して「空虚」ではない。むしろ価値規範の空白を衝いて、欲望の自己増殖が生みの充満をもたらし、これを容認する新たな世俗的倫理が生まれる。ジャン・スタロビンスキーは、われわれが生得観念を信じることをやめたとき、われわれは「空虚感の不安から逃れるため」束の間の充実と緊張を果てしなく追い求め、「快樂追求であれ、商業の拡大であれ、自然開発であれ」、どこまでも世界を拡大していこうとする、と述べている (Starobinsky, 1964, 14-15 頁)。ピエール・バールは、「われわれを動かすのは頭の中の一般的な意見ではなく、心の中に今ある情念である」とし (Bayle, 1683, p.410/221)、マンデヴィルは、宗教心とは無縁の、世俗の生活で味わう心中深くから生じる精神の高揚や満足こそは人間にとって「最大の喜び」であり、このような満足への希求こそは、人間を内部から突き動かす根源的な動因であると考えた (Mandeville, 1729, pp.18-19/18-19)。新たな世俗的倫理は、世俗の生活を生きる人々の集合的精神に見られる一定の傾向性を反映したものであるが、それは、こうしたいわば無限の拡大軌道を求める心中の情念に即したものであったと言えよう。欲望の満足や「安楽な暮らし」によって世俗の幸福を実現しようとするのは決して罪ではない、しかも、私欲に従うことは欲求の満足や快樂を求める人間の抗いがたい普遍的本性 (心中の情念) の発露にはかならない。このような世俗的倫理と世俗化の論理こそは、商業社会・消費社会へと社会を大きく変容させていく基本原理であった。

このような大きな変容が生じたのは 17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけてであったが、それはポール・アザールが、「しかし、神的次元の道徳をぶちこわした上で、それを人間の次元で再建するにはどうしたらいいか。これからは面倒だった」 (Hazard, 1935, 352 頁) と述べた「ヨーロッパ精神の危機 (1680~1715 年)」の時代、あるいはピーター・ゲイのいう「近代性への前奏曲」をなし、18 世紀啓

蒙を特徴づける「神経の回復」 (Gay, 1969, 4 頁) を準備した時代であった。そして、このような舞台のダイナミックな変転とともに経済学の生成が促されていったと考えることができる。ルイ・デュモンはスミスの『国富論』に経済学の誕生をみる通説に従いつつ、経済学の成立要件として、経済認識の体系性、政治の領域からの自立、道徳の領域からの自立の 3 つを挙げ、ケネー、ロック、マンデヴィルをそれぞれの要件にかかわる先蹤者として論じた (Dumont, 1977, pp.43-49)。しかし『国富論』がそうであるように、経済学は富裕の科学であるとするならば、その成立・形成のためには、何より「安楽な暮らし」によって世俗の幸福を求める人間の功利的情念が、抑圧されるのではなく、広く解放されていなければならない。「貧者は救いの道にいる」 (Groethuysen, 1927, 226 頁) というような倫理観が支配的な状況では富裕の科学は無用であろう。したがって、脱宗教の新たな地平上で世俗的倫理に押し出される形で、世俗的幸福の条件を探求する富裕の科学としての経済学が生成していったと言ってよい。そしてその経済学は、スミスの登場を待つまでもなく、世俗化のトレンドが推し進める舞台の変転のただなかであって、政治や道徳からの経済世界の規範的な独立の自覚の上に自由主義の経済学を構想したボワギルベールの経済論説によって、一つの成立をみたと言いうことができる。しかもボワギルベール以降の展開は、上述のように、あるいは前著で詳細に論じたように、『国富論』を収束点とするイギリス経済学の流れとは異なる独自の特徴を有していた。前著で「フランスの事情にそくして、もう一つの経済学の形成を語りうる可能性」 (416 頁) を述べたゆえんである。

では、ボワギルベールの、また彼以降の特徴的な展開を生み出すことになる思想的源泉はどのようなものであったのだろうか。研究動向にも触れつつ¹⁾、功利主義や「利益」説の視点からその概略を示そう。

2. 17 世紀フランスの新思潮——アウグスティヌス主義

ボワギルベールの、そして彼に始まる 18 世紀フランス経済学のおもな思想的源泉となったのは、人

間と社会に関する新たな見方、すなわち功利主義的な人間観や社会観、そして利益説として知られる新思考を生み出した17世紀後半以降のフランスの新思潮であった。この思潮を担ったのは、ジャンセニストのパスカル、ピエール・ニコル、ジャン・ドマ、モラリストのラ・フォンテーヌ、ラ・ロシュフコー、そしてリベルタンのピエール・ベールなど、思想的立場もまちまちと言ってよい多彩な人物群である。彼らは、程度の差はあれ、共通してアウグスティヌス主義の影響下にあった。彼らは一様に原罪説に拠って立つアウグスティヌス主義のペシミスティックな人間理解に基づいて、人間を自己愛・利己心に駆り立てられる欲求の主体とみなし、「利益」を求める人間の功利的情念をクローズアップした。さらにニコルやドマは、自己愛に発する功利的情念はいかにして社会的効用を発揮して社会秩序の形成に寄与するか、という「情念と秩序」の関係に光をあてた。

アウグスティヌス主義とは、教父アウグスティヌスの思想に集約される神学上の伝統主義のことであり、「17世紀はアウグスティヌスの世紀である」(Sellier, 1970, p.11)と言われるほどに、多くの思想家・宗教家がこれを奉じた。経済学の起源との関連で注目されるべきは、フランスのカソリックの一派で、ポール・ロワイヤル修道院に結集したジャンセニストのアウグスティヌス主義・ジャンセニズムである。対抗宗教改革運動のなかで、ジェズイットがルネサンス以来のユマニズムの流れに棹さして、人間的活動の相対的自律性、言い換えれば自由意志の可能性を承認する方向へキリスト教をいわば世俗化していくのと対照的に、ジャンセニストはそのような時代の傾向を真っ向から批判し、むしろアウグスティヌスの原点(恩寵主義)への回帰を唱え、「個人の内的革新を通じて、始原のキリスト教的理念の再生を志向する」(飯塚, 1984, 6頁)。すなわち人祖アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間の根本的墮落と無力を強調し、救いに至る道としての人間の自由意志や功績の意義を否定し、人間の救いはもっぱら恩寵によるほかはありえないと説く。こうして、人間は神の恩寵にすがることしかない墮落した無力な存在となる。そして人間の理性の力を抛り所にするストア的美徳、栄光の希求・英雄の賛美などのあらゆる理想主義を、人間の邪悪

さや無力さへの無自覚による虚飾・虚栄とみなして徹底的に批判した。ファッカレロは、17世紀におけるアウグスティヌスの影響を次のように述べている。「アウグスティヌスの融通無碍な名著は様々な解釈を許した。ヤンセン、サン・シラン、パスカル、アルノー、ニコルだけでなくベルールやボシュエやフェヌロンまでもがそれを引き合いに出している。しかし、人々の注目を集めたのは、なかでも聖アウグスティヌスが神を持たざる人間や地上の園を過酷で悲観的な姿で描いた叙述である。この17世紀が浮き彫りにし、また聖職者でない多くの著者たち——例えばラ・ブリュイエール、ラ・ロシュフコー、ボワロー——に深く影響を与えているのも結局こうした観点である」(Faccarello, 1986, p.89)。

墮罪後の人間は無力で墮落し、そのほとんど唯一の行動原理は自己愛をおいてほかにない。ラ・ロシュフコーの次の言説は、アウグスティヌス主義の自己愛がどのようなものかをよく表している。

神は人間の原罪を罰するために、人間が自己愛を己の神とすることを許して、生涯のあらゆる行為においてそれに苦しめられるようにした (La Rochefoucauld, 1678, p.165/179)。

……自己愛の欲望ほど抗いがたいものではなく、自己愛の意図ほど秘められたものではなく、自己愛の行動ほど巧妙なものはない。その柔軟さは筆舌に尽くしがたく、その変貌ぶりは変身の玄妙を凌ぎ、その精緻は化学を凌ぐ。……自己愛は体質の相違に従ってさまざまな傾向を持ち、それらの傾向が自己愛を時には名誉、時には富、時には快樂へと駆り立て、奉仕させる。……以上が自己愛の肖像であり、全人生はその大きな長い動揺にほかならない (pp.134-36/147-51)。

このような悲観的な人間理解に立って人間と社会との関係を考えるとき、排他的な自己愛に支配された人間の功利的行動がいかにして社会の秩序すなわちその維持存続を可能にするか、という逆説的状況の解明を迫られることになる。墮罪後の世界において、人間だれもが自己愛・利己心のおもむくままに振舞うが、しかしこの世界は必ずしも混沌に陥ることなく何かしら秩序が成立しているようにみえる。自己愛という悪・悪徳はいかにしてこのような調

和・秩序をもたらすのか。同じジャンセニストでも、俗世間からの隠棲を説いたパスカルなどとは違って、世俗の社会の維持存続に関心を示したニコルやドマが解明しようとした「情念と秩序」の関係とは、このことである。

1994年に、フランスのモラリストをめぐって、フランスとアメリカの研究者の間で「道徳から経済学へ」と題するシンポジウムが行われたが、このときのジャン・ラフォンの報告(Lafond, 1996a)は、経済学の生成に関する新たな研究アプローチがどのようなものか、その要点をよく示している。ジャン・ラフォンは、道徳的領域からの経済学の自立を可能にしたものは、利己心の自由は結果として最大の善あるいは社会的効用をもたらすという調和の観念であるとし、この点で、「パスカル、ニコル、ラ・ロシュフコーといったジャンセニストのアウグスティヌス主義からベールやマンデヴィルといったカルヴィニストのアウグスティヌス主義を経て、スミスの経済学にまで至る連続性」に注目している。そして、この調和の観念の由来を、「罪それ自体を普遍的善に転換するアウグスティヌス主義の不可思議な錬金術」に見出している(p.187)。では自己愛・利己心の自由な振る舞いを善に転換する錬金術とは何か。ラフォンによれば、それは基本的には、人間には不可知の神慮の働きによるものと考えられた。排他的な自己愛は、他方でニコルの言う「礼節」のように、共同体の維持存続に寄与する社会道徳の源泉となりうるが、そのような可能性を含めて、自己愛・利己心に由来する悪を善に転換しうるものは何より神慮の働きであったのである。そしてこのとき「個人的エゴイズム」は正当化され、この正当化の上に経済学が成立するとされる。

ラフォンは他方で(その後の論考で)、フランスの特徴的な新思潮をもたらした要因として、アウグスティヌス主義と、1670年代以降に登場するエピクロス主義との「邂逅」を挙げている(Lafond, 1996b)。この2つの思潮の邂逅によって、功利主義や利益説とも親和的な「新たな倫理」が生まれたというのである(p.359)。いわばこの邂逅が道徳的な調和をもたらす「錬金術」となったとも言えよう。原罪思想に基づいて教父アウグスティヌスの原点への回帰を唱えるアウグスティヌス主義と反宗教のエピクロス主義とでは、それぞれの立脚点は正反対で

あるが、ラフォンによれば、人間の行動の動機を何より享楽や快樂への願望に求め、それを自己愛の発露とみる点で両者は共通しており、それゆえストア主義やセネカへの批判でも共通している。そして、英雄的な夢と現実とを混同してその知的誠実さを疑わせるストア主義とは違って、エピクロス主義の真実は、それがもたら自己愛に支配される現実の人間の弱さに適合的な人間理解に基づいているところにある(p.361)。したがって、ラ・ロシュフコーやベールが眼前の事実、すなわち「あるがままの事物」に忠実であろうとしたとき、エピクロス主義との邂逅が生じ、愛徳か絶望かの危険な選択を迫られることなく、愛徳がなくても存続しうる、自己愛に基づく人間同士の絆の認識(新たな倫理)が生まれた、とラフォンは考えるのである。

17世紀の新思潮において、「礼節」などの自己愛に基づく新たな倫理を自己愛の偽装による欺瞞的な道徳的秩序として示したのは、ジャンセニストのニコルやドマであるが、言うまでもなく、彼らはエピクロス主義それ自体とはまったく無縁である。したがって、二つの思潮の邂逅によって新たな倫理が生まれたというラフォンの指摘は簡単に首肯できるものではない。しかし他方で、アウグスティヌス主義が描き出す悲観的な人間の姿は、「われわれの眼に映るがままの人間およびその自然＝本性」(Bénichou, 1948, 100頁)を表したもので、「確かに悲観的で厳しいが、根拠があり、経験によって確認される人間像」(メナール, 1989, 137頁)であり、エピクロス主義の快樂主義的な人間像と重なることは確かである。ピエール・フォースはラフォンに続いて、この二つの思潮は、世俗に生きる人間を快樂に従属する存在として捉え、利己心の学説に立つ点では同じであるとして、「人間は各々自分自身の快樂によって導かれる」というヴェルギリウスの言葉は、ガッサンディやパスカルからベールやマンデヴィルに至るエピクロス主義者とアウグスティヌス主義者の共通のモットーであったし(Force, 2003, p.57)、さらには美德批判の点で、言い換えれば、ストア主義という共通の敵を持っていた点で、両者は同じ地平に立っていたと述べている(p.59)。人間を墮落した存在と捉えるアウグスティヌス主義者の目からみれば、ストア的美徳は「偽装された悪徳」にはかならないし、そもそも人間が神の恩寵な

くしてみずからの自由意志によって徳に至ることなどありえない、そして、貪欲（快樂の追求）こそが人間行動の唯一のエンジンと考えるエピクロス主義者にとっても、栄光の情念に基づくストア的美徳は偽善・欺瞞にほかならない、という次第である²⁾。

要するに、アウグスティヌス主義者もエピクロス主義者も同じく、自己愛に突き動かされる「ありのまま」の人間の真実の姿を、すなわち、生活の便宜や安楽や感覚的享樂に世俗の幸福を見出す生身の人間の姿を捉え、そうしたリアリズムの視点からストア的理想主義の欺瞞性を批判したのである。アウグスティヌス主義からみれば、それは原罪を背負った人間の罪深い姿であるが、エピクロス主義からみれば、心中の情念の赴くままに自己実現を目指す真っ当な人間の姿である。そして罪深いか真っ当かは別にして、このとき自己愛をほとんど唯一の行動原理とする人間の行動の動機あるいは価値判断の基準となるのは、自己利益あるいは功利・効用であり、公共善が意味するものも社会の維持存続や繁栄にかかわる公共的利益であった。ラ・ロシュフコーは「利益は自己愛の魂である」(La Rochefoucauld, 1678, p.166/180) と述べたが、その「自己愛は体質の相違に従ってさまざまな傾向を持ち、それらの傾向が自己愛を時には名誉、時には富、時には快樂へと駆り立て、奉仕させる」(p.135/149) としているように、自己愛の求める「利益」は多様であり、必ずしも経済的利益とイコールではなかったが、いずれにせよ、そこに浮き彫りにされているのは「利益」志向の功利的人間像である。それゆえ、アウグスティヌス主義であれエピクロス主義であれ、17世紀の新思潮によって醸成されたこのような人間像は、「利益」説の核心をなすとともに18世紀の功利主義の源泉と見なされることになる。

3. 功利主義と利益説

18世紀のフランス功利主義の源流がジャンセニスムの道德論にあることは、早くからマルセル(Marcel, 1957) が指摘していたし、ロスクラック(Rothkrug, 1965) もいち早くニコルの論説に功利主義の源泉を見出していた。ジャンセニスムあるいは広くアウグスティヌス主義に功利主義の源流をみる見方は、今日ではかなり共有されている。確か

に、アウグスティヌス主義者と言ってよい論者の描く功利的人間像は、利己心の哲学を快苦原理として徹底化した功利主義の人間像と基本的には異なるものではないし、ニコルやドマなどの論説はそのような功利的人間と公共善・公共的利益との関係に触れている点でも、またそのかぎりでも、18世紀の功利主義の先蹤をなしていると言うことはできよう³⁾。しかし、パスカルやニコルは言うまでもなく、モラリストのラ・ロシュフコーを功利主義者と呼ぶのは無理があることから明らかなように⁴⁾、アウグスティヌス主義の、功利主義の源流としての歴史的意義は限定的に捉える必要がある。何より、彼らにとっては自己愛の発露は罪であり悪であって、それゆえそこに人間の幸福はありえない。これに対し、功利主義の重要な含意を、欲求の満足・快樂を善とみなし、そこに人間の幸福をみる世俗の幸福の觀念に求めるならば、功利主義の源泉としていっそう注目し得るのは、私欲の振る舞いを人間本性に根差す自己実現への真っ当な願望の表れとみなすエピクロス主義であり、その影響が顕著なベールやマンデヴィルであろう。マンデヴィルは人間理解についてアウグスティヌス主義のペシミズムを、道徳的判断についてそのリゴリズムを受け継いだから、彼にとっては心中の情念とはいえ、自己愛に従って欲求の満足や快樂を求めることは悪徳にほかならない。しかし同時に、彼が言うには、現世の幸福をもたらすものは快樂の享受にほかならない。「誰でもできることなら幸福であろうとし、快樂を味わい苦痛を避けようとする」(Mandeville, 1714, p.139/128)、「われわれを喜ばすものはその点において善である、そしてこの基準に基づいて、あらゆる人間は、隣人のことなどほとんど考慮せずに、できるかぎり自分のためによかれと願うのである」(1714, p.367/338)。世俗の幸福は快樂を味わい苦痛を避けるところにあり、この人間本性の中心から発する根源的欲求を満たすものは善であった。ここに、諸欲求の満足や快樂の享受に世俗の幸福をみる功利主義の幸福觀がよく示されている。

ところで、17世紀に蘇ったエピクロス主義の觀念にリアリティを与えたものは、一面では、商業社会の進展とともに進捗する世俗化の一般的傾向であったと言ってよい⁵⁾。欲望を自己抑制するのではなく、その満足によって世俗の幸福を実現しようと

求めるのは決して罪ではないとする世俗的倫理や世俗的価値が広まっていくが、それとともに経済活動への評価の転換、言い換えれば富や奢侈に対する軽蔑からその容認・称賛へという価値規範の大きな転換が生じる。しかし、言うまでもなく、そのような幸福観や倫理の形成、さらには富や奢侈に対する評価の転換がエピクロスの名においてはじめて可能となるわけではない。脱宗教・世俗化を推し進める人々の集合的精神の渾然たる歩みが、この「危機の時代」(アザール)にこれらの観念や倫理を生み出したと言うほかないであろう。ボワギルベールやマンデヴィルの功利的人間像や社会像すなわち欲求の体系の構想はこのようなコンテキストの所産であり、ボワギルベール以降の18世紀のフランス経済学もまた、同じコンテキストにおいて欲求や効用の視点に基づく独自の経済学の系譜を紡ぐことになる。言い換えれば、そのような歴史的な文脈から、社会を「欲求の体系」と見立てて、生産に対する消費・消費欲求の規定性に着目するボワギルベールやマンデヴィルの功利主義的な経済学が生まれ、ムロンやフォルボネなどへと引き継がれていくのである。そして社会の変容が進むほどに、サン＝ピエールやヴォルテールのバスカル批判や原罪思想批判が端的に示すように、アウグスティヌス主義やそれに立脚したりゴリスムは影をひそめていき、それに代わって、エピクロス主義が、そしてそれとストア主義との対抗軸が前面に出ることになる。

こうして「ありのまま」の人間の姿、すなわち世俗的価値や世俗的倫理に支配され、心中の情念の求めるままに振舞う利益志向の功利的人間像がクローズアップされることになった。17世紀後半以降のフランスの新思潮の特徴は、結局、この点に集約することができるが、ではこのとき自己利益を求める人間の功利的な行動は結果としてどのような秩序をもたらすだろうか。情念と秩序の関係は何か、あるいは自己愛・利己心の自由な振る舞いを公共善に転換するもの(「錬金術」)とは何か、という問題である。既にみたように、ラフォンは2つの思潮の「邂逅」が秩序形成に寄与する新たな倫理をもたらしたと考えたが、しかし、そのような見方は、エピクロスの名において現世の幸福を語り、公益を経済的な繁栄のイメージに重ね合わせた(ベール→)マンデヴィルに連なるラインにはある程度当てはまると

しても、ニコルやドマの秩序論やその延長上にあるボワギルベールの秩序論にはおそらく当てはまらない。

一方、ハーシュマンは、秩序のために情念をいかに制御するかという大問題に関して、情念によって情念を相殺するという見方に、とくに「利益」を求める貪欲の情念が秩序形成に果たす役割を強調する見方に注目する。すなわち経済的利益を追い求める貪欲は、比較的無害な、しかし強い情念であり、野心や権力欲といったもっと危険な他の諸情念に対抗し、これを相殺する、そしてそればかりか、「商業の時代」においては、おのずから経済秩序・経済法則が政治的秩序のあり方を規定するようになり、いわば「利益」への顧慮が愚かな専制政治の可能性を小さくする、という見方である(Hirschman, 1977, p.93/93)⁶⁾。確かに情念による情念の相殺が秩序をもたらすという観念はこの時代に特徴的であり、例えばニコルは自己愛を自己抑制させる要因の一つに「利益への配慮」をあげている。またサン＝ピエールは端的に、「不正な情念の働きに駆り立てられる人を誰が押しとどめ、引き留めることができようか。唯一のやり方は、欲望であれ、恐怖であれ、もっと強い情念によって引き起こされる反対の動き[を喚起すること]である。……大きな恐れが最も活発で激しい情念を沈黙させ、社会のこの成員を彼の意に反して平和の方向へと、すなわち彼自身の利益へと導くのである」(abbé de Saint-Pierre, 1713, t.1, pp.20-21)、と述べている。このような、人間の行動原理や社会の秩序原理として「利益」を重視する見方を利益説と呼ぶとすれば、これもまた上述の功利主義的な人間像や社会像を生み出したのと同じ歴史的な文脈の所産であると言ってよい。このような利益説はその後の思想史研究に大きな影響を与えたが、ハーシュマンはその淵源を含めて利益説の歴史的展開の詳細を論じたわけではなかったから、これ以降、この利益説は様々な視点から吟味されることになる⁷⁾。ハーシュマンはさらにこの利益説とスミスとの関係について、スミスの考えるところでは「人類の大部分を占める民衆」にとって「生活状態の改善」のために経済的利益を追求することがほとんど唯一の行動原理であるから、そこでは利益をもって他の諸情念に対抗させることは意味をなさなくなり、こうしてスミス以降は、個人的利益の自由

な追求が一般的利益を増大するというスミスの命題が議論の焦点となっていく、と述べている (p.112/113)。

ハーシュマンはラフォンと同じくスミスを基準点として経済学の生成の問題を論じており、利益志向の功利的人間像やそうした人間が織りなす「利益による秩序」の側面において、スミスに及ぼしたマンデヴィルの影響を重視し、さらにマンデヴィルの思想的源泉としてのフランスの新思潮に注目している。こうして、ニコルやラ・ロシュフコーなどからマンデヴィルを経てスミスへと至るラインが強調されるが、彼らの視野にはボワギルベールの存在はまったく捉えられていない。しかし、スミスについてのハーシュマンの指摘は、マンデヴィルと思想的源泉を共有するボワギルベールにもそのまま当てはまることに注目しなければならない。ニコルは自己愛の偽装という欺瞞のメカニズムによる道徳的秩序の可能性に目を向けたが、しかし彼は、最終的に罪深い人間の心底に刻まれた自己愛という悪が公共善に転化するのを最終的に保証しうるものは、為政者が神慮に基づいて案出し維持する力づくの「政治的秩序」のほかにはないと考える。それゆえ、ニコルの場合、便宜を求めてやまない人間の功利的行動は、宗教・政治の規範にしっかりと繋ぎとめられていた。これに対し、ボワギルベールは情念による情念の相殺や新ストア主義の調和の観念を用いることもなく、利己心に基づく自由な競争は「神慮の働き」に導かれて経済均衡に至りうることを論証した。そしてこの「神慮の働き」は「奇蹟」という名のブラックボックスに隠されているのではなく、市場の強制力という、利己的情念（自己愛）の対立を調整しうる安定化装置のことであり、そしてそれはラフォンがというような不可知ではなく、十分に分析可能な対象であった。その分析は必ずしも十分なものではなかったが、ボワギルベールはこのような市場機構という自己愛の抑制装置の発見によって、いち早く経済学の創生を果たすことになる。

4. 経済学のフランスの起源

利益志向の功利的人間像を浮き彫りにした 17 世紀フランスの新思潮は功利主義や「利益」説の源泉であり、ボワギルベールやマンデヴィルの経済学の

直接の母胎であったが、それが育んだ世俗的倫理は、いわば啓蒙の共通因子として 18 世紀ヨーロッパ啓蒙の大きなうねりを引き起こす一要因でもあった。啓蒙の含意は多岐にわたるが、その本質は脱宗教＝世俗化にあるとすれば、「安楽な暮らし」による世俗の幸福への希求を是認する世俗的倫理や世俗的価値の広まりが、啓蒙の大きなうねりを引き起こした動因の一つであったと考えられるからである。ポール・アザールは、18 世紀啓蒙に向かう時代精神のドラスティックな転換を準備したフランスの新思潮に早くから注目していた。最近になって、新たな視点から統一的な啓蒙の像を結ぼうとしたジョン・ロバートソン (Robertson, 2005) は、啓蒙の本質は生活状態の改善への関心にあるとして啓蒙と経済学の密接な関係を浮き彫りにしつつ、この新思潮とその延長上に位置するムロンの歴史的意義を強調している⁸⁾。

17 世紀の新思潮とそれが生み出した功利的人間像は 18 世紀啓蒙と経済学の共通の母胎であったと言ってもよい。したがって、フランス起源の経済学は、一面で、利益や快楽を増大し、世俗の幸福を増大するという啓蒙の課題に応える啓蒙の経済学としての性格を帯びることになる。サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューが三者三様の仕方でのこの課題に向き合うであろう。とりわけムロンは、生産（供給）と消費（需要）、そしてそれら両局面の規定要因としての貨幣・信用システムからなる近代経済のマクロ的構造の全体像を初めて捉えた。この点でムロンは、ボワギルベールと並んで、経済学の生成史において重要な結節点の位置を占めることになる。また、ムロンが消費の局面をおもに奢侈の視点から論じたように、世俗の幸福という啓蒙の課題を背負ったフランス経済学は、一面では、ムロンからヴォルテール、フォルボネ、ビュテル・デュモンなどへと続く、世俗の享楽を求める心中の情念の本性をその一つの根拠とする奢侈容認論の系譜と重なっている。しかし他方では、商業社会の現況を批判し田園への回帰を唱えるストア的理想主義の影をまとった奢侈批判が繰り返され、そのような経済学への批判が展開されることになる。前に、アウグスティヌス主義の退潮に伴って、エピクロス主義あるいは功利主義のリアリズムとストア的理想主義の対抗軸が前面に登場すると述べたが、この対抗もま

た典型的には奢侈の是非をめぐる対立として現れるのである。

ところで、ボワギルベールの経済学の特徴もまた、一つには、マンデヴィルと同じく欲求や効用の視点に立って消費欲求の本源性とその経済機能に着目し、消費欲求を社会（「欲求の体系」）の一構成原理とするなど消費主導の経済ビジョンを描いているところにあった。これに対し、スミスは人間の境遇改善欲求を所与として、この欲求に応えうる富の増大や一般的富裕の条件をおもに生産の部面で探求し、客観価値説や、節約・節欲の視点に基づく資本蓄積論に立脚して生産力の自己増殖、言い換えれば資本主義社会の自律的発展の論理を導き出した⁹⁾。このスミスの放った強烈な光によって、消費・消費欲求の意義が見えにくくなり、スミスを基準点にして経済学の生成を論じるとき、この側面が視野から遠ざけられがちとなったことは確かであろう。しかしながら、富裕の科学としての経済学の生成の条件は、何より、欲求の満足や「安楽な暮らし」による世俗の幸福を求める人間の功利的情念が解放されることであるとすれば、経済学という新興科学の成り立ちを論じるとき、注目すべきは、むしろこのような情念の発露である消費欲求や消費行動に着目し、そうした人間の織りなす欲求の社会の動態に目を向ける経済論説であろう。いまだアンシャン・レジームの18世紀啓蒙に向かう「危機の時代」であり、いわゆる産業資本が主導する資本主義社会の経済システムなどおぼろげにさえもその姿をみることはできない。しかしフランス社会は、世俗化の進捗や商工業の発展とともに商業社会・消費社会へと大きく変貌しつつあり、この変貌を反映したボワギルベールやムロンなどの経済論説は、現代へと繋がる近代経済の重要な構成諸要素を見事に照らし出した。同じコンテキストに属するマンデヴィルが、消費社会の誕生を目の前にして300年前に描いた奢侈や消費行動が現代の消費社会のあり様を先駆的に示しているのは、その典型例と言えるであろう。

経済学の多元的形成の一翼を担うフランス起源の経済学は、『国富論』に収束していくイギリス経済学の展開と比較するとき、「もう一つの経済学の生成」を示しているが、時代の大きな転換点にあってボワギルベールやムロンが成し遂げたこと、そして彼らを育んだ特徴的な思想的コンテキストに目を向

けるときには、そのような評価を突き抜けて、経済学のフランス的起源を論じることのできる問題領域が現れるように思える。このとき、ヨーロッパ出自のこの新興科学の起源について、これまでとは異なるその像が浮き彫りにされ、そして、逆に、このような経済学を生み出したヨーロッパ近代の一本質が炙り出されることにもなる。

注

- 1) 経済学の起源とフランスのコンテキストとの関係を探ろうとする試みがなされるようになったのは、比較的最近のことである。本章はこのような新しい研究動向に沿いつつ、そこから一步踏み込んで、「もう一つの経済学の形成」という以上に、経済学のフランス的起源を論じようとする試みである。研究動向について、詳しくは、筆者のサーベイ論文（米田，2010）を参照されたい。
- 2) ロバートソンもまたこの二つの思潮に注目し、その「収束」を通じて人間本性と社会の可能性に関する新たな思考が生まれたとしている（Robertson, 2005, p.9）。あとでも触れるが、ロバートソンは17世紀フランスで生まれたその新思考がナポリ啓蒙とスコットランド啓蒙の共通の思想的源泉であったと考えている（p.46）。
- 3) 功利主義は、一般に、ベンサム「功利性の原理（最大幸福原理）」の観念によって定式化されたと考えられているが、その特徴は、17世紀以来の人間本性論における自己愛・利己心の哲学を快苦原理として徹底化し、その上で快楽に由来する幸福の社会的増大（快苦計算）を価値判断の基準に据えて、これを立法論の領域に適用しようとしたところにある。本稿では、そのようなベンサム功利主義の含意よりももっと広義に、功利や効用を価値判断の基準とする見方を「功利主義」あるいは「功利主義的」と表現しており、必ずしも私益と公益の一致（帰結主義）を前提としないから、快楽主義・エピクロス主義・利己主義とも大いに親和的である。
- 4) セルジュ・ラトゥーシュも、「ジャン・クロード・ペローのようにこれらのモラリストを先駆的な功利主義者とするのは早計である。そのようにみなせば、明らかに反功利主義的な彼らの考えを誤解することになるであろう」（Latouche, 2005, p.118）と述べている。
- 5) おもにルクレティウスの『物の本質について』に基づくエピクロス哲学は、神の不在や人生の有限性の主張によって、キケロの哲学的批判的であり、かつ初期教会の教父たちの非難的であったが、17世紀の科学革命の時代に蘇り、スコラ的アリストテ

レス主義に取って代わる。ウイルソン (Wilson, 2008) は、近代の社会契約論や功利主義の源泉はこの蘇ったエピクロス主義に見出されるとし、エピクロス主義の自然像や社会像が、明示的であれ暗示的であれ、デカルト、ガッサンディ、ホブズ、ボイル、ロック、ライプニッツ、パークレーの著作においてどのように組み込まれているかを明らかにしている。エピクロスの復活の延長上に経済学の生成のためのフィールドが拓かれていくように思えるが、著者にとってこの経済学の生成の問題はまったく関心外であり、ベールなどのフランスの新思潮やマンデヴィルとの関係についても触れられていない。

- 6) ハーシュマンはこのような考え方をモンテスキュースチュアート説と名づけているが、アベ・ド・サン＝ピエールやムロンにもみられる考え方である。
- 7) ヘイルブロン (Heilbron, 1996) は、フランスのモラリストの思想的・文学的営為に即してこの利益説の淵源を明らかにしている。彼によれば、利益概念は、1500年から1700年の間に政治理論、自然法学、道徳哲学の三つの知的伝統のなかで磨かれてきたが、道徳哲学の領域でこれを最初に生み出したのはモンテーニュに始まるフランスのモラリストの伝統であり、具体的には、それはペシミスティックなジャンセニズムの心理学と世俗の貴族モラリストとの交わり、あるいは両者の緊張関係のなかで生まれたとされる。そして利益説の普及に関しても、ジャンセニズムの主題を世俗化したラ・ロシュフコーなどのモラリストの役割を重視する。もともとフランスでは多彩な礼節のマナーを操る宮廷人の行為を理解するために、人間行動の心理学への特別の関心がみられたが、とくに、裏切りや背反に満ちていたフロンドの乱の後に、幻滅した貴族のモラリストによって「利益」を唯一の行動原理とする人間理解が普及することになったとしている (pp.79-90)。
- 8) ロバートソンは、スコットランドとナポリという2つの「国民的」コンテクストのなかに単一の啓蒙事例をみだし、その特徴をおもに、17世紀後半のフランスの新思潮を共通の源泉とし、自国が置かれた立ち後れた状態からの脱却という啓蒙の課題に対して、ともに経済学の知見によって立ち向かおうとしたところに求めた。ジェノヴェージやヒュームなどへのムロンの影響に注目し、フランスのムロンをキーパーソンとして重視している。エピクロス主義に基づいて人間の生活状態の改善という啓蒙の共通課題に応じるために経済学に向かうこと自体は、スコットランドとナポリに限られたことではないように思えるが、ヨーロッパ啓蒙の大きな視点からフランスの新思潮の歴史的意義を捉えうることを示した点で、ロバートソンの指摘は興味深い内容を含んで

いる。

- 9) フランスの新思潮とスミス経済学の成立との関係について、『貿易の嫉妬』(Hont, 2005)の序文で、ホントは次のように述べている。プーフェンドルフの商業的社交性(商業がもたらす効用・利益に基づく社会的な結合)の観念はスミスに影響を与えたが、その観念については「もう一つの道筋があった。商業的社交性は、ただアリストテレス主義者だけではなく、ストア派の人々やキケロ、またとくにアウグスティヌスといったキリスト教の教父たちにとっても最大の関心事であった。プーフェンドルフの新アリストテレス主義に替わる選択肢は、自然法学のなかからではなく、フランスのアウグスティヌス政治神学から出てきた。世界商業を通しての人類の絆の最も明確な表現は、フランスのアウグスティヌス神学者にして道徳批評家であったピエール・ニコルの著作に見られる。ニコルとプーフェンドルフの見解の類似性を説明することは比較的容易である……」(35頁)、あるいは、「スミスは、プーフェンドルフやニコル、そしてフランスの他のモラリストたちによって最初にその輪郭が描かれた見通しを、結び合わせ再加工したのである」(37頁)。ホントは、プーフェンドルフとニコルは異なる立場から同じ商業的社交性の認識に達し、この面で同じくスミスに影響を与えたと理解している。ホントは「必要がすべてを結びつける」というアリストテレスの考え方は、誰にでもどこでも適用可能であった」(34頁)と述べているが、実際、ニコルも「人間同士の間で平和を維持する手段について」においてアリストテレスの『政治学』のなかのこの一節を用いている(Nicoe, 1671b, p.110)。スミス経済学の成立に関して、一般に、近代自然法学の社会契約論的思考が同感理論と「みえざる手」の観念を中軸とするスミスの道徳哲学によって克服され、そこで示された「市民社会の自律性」の認識(利己心の自由→秩序)の延長上に、「自然的自由の体系」の論理に基づく『国富論』の自由主義の経済学(利己心の自由→経済的繁栄)が生み出されたと考えられている。ホントに即して言えば、このような理解はスミス経済学の成立の「もう一つの道筋」(ニコル→マンデヴィル→スミス)を考慮していないことになろう。ちなみに、本稿でいう「もう一つの経済学の生成の道筋」はボワギルベールを結節点とするものであり、ホントのいうスミスに至る「もう一つの道筋」とは、重なるところはあるが異なっている。

引用文献

- Bayle, P. (1683), *Pensées diverses, écrites à un docteur de Sorbonne à l'occasion de la comète qui parut au mois de décembre 1680*, Rotterdam, t.2

- (野沢協訳『彗星雑考』法政大学出版局、1978年)。
- Bénichou, P. (1948), *Morales du grand siècle*, Paris, Gallimard (朝倉・芳賀訳『偉大な世紀のモラル：フランス古典主義文学における英雄的世界像とその解体』法政大学出版局、1993年)。
- Dumont, Louis (1977), *Homo aequalis I, Genèse et épanouissement de l'idéologie économique*, Gallimard.
- Faccarello, G. (1986), *Aux origines de l'économie politique libérale: Pierre de Boisguilbert*, Paris, édition anthropos.
- Force, P. (2003), *Self-Interest before Adam Smith. A Genealogy of Economic Science*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Forbonnais, François Véron de (1767), *Principes et observations économiques*, Amsterdam, Marc Michel Rey, 2vols. [München, Kraus, 1980].
- Hazard, P. (1935) *La crise de la Conscience européenne (1680-1715)*, Paris (野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機 1680-1715』法政大学出版局、1973年)。
- Heilbron, J. (1996), 'French Moralists and the Anthropology of the Modern Era: On the Genesis of the Notions of 'Interest' and 'Commercial Society,' in *The Rise of the Social Science and the Formation of Modernity*, edited by J. Heilbron, L. Magnusson and B. Wittrock, Dordrecht, Boston and London, Kluwer Academic Publishers.
- Hirschman, A. O. (1977), *The Passions and the Interests. Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, Princeton, Princeton University Press (佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局、1985年)。
- Hont, I. (2005), *Jealousy of Trade*, Cambridge, Massachusetts, and London, The Belknap Press of Harvard University Press (田中秀夫監訳『貿易の嫉妬』昭和堂、2009年)。
- Gay, Peter (1969), *The Enlightenment: An Interpretation Volume II: The Science of Freedom*, New York (中川他訳『自由の科学—ヨーロッパ啓蒙思想の社会史—』I、ミネルバ書房、1982年)。
- Groethuysen, B. (1927), *Origines de l'esprit bourgeois en France. I: L'Église et la Bourgeoisie*, Paris (野沢協訳『ブルジョワ精神の起源』法政大学出版局、1986年)。
- Lafond, Jean (1996a), "De la morale à l'économie politique, ou de La Rochefoucauld et des moralistes à Adam Smith par Malebranche et Mandeville," *Da la morale à l'économie politique*, Dialogue Franco-Américain sur les Moralistes Français, Actes du colloque de Columbia University (1994), Textes réunies et présentées par Pierre Force et David Morgan, Publications de l'Université de Pau.
- (1996b), "Augustinisme et Épicurisme au XVII^e siècle," in J. Lafond, *L'homme et son image, Morales et littérature de Montaigne à Mandeville*, Paris, Honoré Champion.
- La Rochefoucauld (1678), *Maximes*, édition de J. Trousset, Paris, 1983 (二宮フサ訳『ラ・ロシュフコー箴言集』岩波文庫、1989年)。
- Latouche, S. (2005), *L'invention de l'économie*, Paris, Albin Michel.
- Marcel, R. (1957), "Du jansénisme à la morale de l'intérêt," *Mercure de France*, 330, pp.238-255.
- Mandeville, B. (1714), *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, London [Part I], with a commentary critical, historical, and explanatory, by F.B.Kaye, 1924, vol.1, Indianapolis, Liberty Fund (泉谷治訳『蜂の寓話 私悪すなわち公益』法政大学出版局、1985年)。
- (1729), *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, London [Part II], by F. B. Kaye, 1924, vol.2, Indianapolis, Liberty Fund (泉谷治訳『続・蜂の寓話 私悪すなわち公益』法政大学出版局、1993年)。
- Nicole, Pierre (1671), "Des moyens de conserver la paix avec les hommes," in *Essais de morale*, Choix d'essais introduits et annotés par Laurent Thirouin, Presses Universitaires de France, 1999, pp.109-180.
- Robertson, J. (2005), *The Case for the Enlightenment Scotland and Naples 1680 - 1760*, Cambridge University Press.
- Rothkrug, L. (1965), *Opposition to Louis XIV, the Political and Social Origins of the French Enlightenment*, Princeton, Princeton University Press.
- Saint-Pierre, Charles-Iréné, abbé de. (1713), *Projet pour rendre la paix perpétuelle en Europe*, 2vols. Utrecht.
- Sellier, Philippe (1970), *Pascal et saint-Augustin*, Paris, Albin Michel.
- Starobinski, Jean (1964), *L'invention de la Liberté, 1700-1789*, Genève, Edition d'art Albert Skira (小西嘉幸訳『自由の創出』白水社、1990年)。
- Wilson, Catherine (2008), *Epicureanism at the Origins of Modernity*, Oxford University Press.
- 飯塚勝久 (1984) 『フランスジャンセニスムの精神的

研究』未来社。
メナール、J. (1989) 「恩寵の神学と人間学」『思想』
3 : 134-144.
米田昇平 (2005) 『欲求と秩序—18世紀フランス経済学

の展開—』昭和堂。
——(2010) 「経済学の起源とアウグスティヌス主義
——17世紀後半のフランス思想を中心に——」『経
済学史研究』51-2。